

## 小説半導体戦争（五）

### 5 全文削除

杉田望

1

年末の東京は、ひどい。自動車の渋滞に巻きこまれ、御茶の水から西新橋まで、たった五キロか六キロたらずの距離だというのに、なんと一時間あまりも要することになった。

石井裕美は地下鉄を利用しなかったことに軽い後悔を覚えたがこうなつてはしかたがない。渋滞のなかを寸刻みで走る車に揺られながら、取材が難航している反トラスト法違反事件のことを考えていた。

車がまともに走り出しだしたのは、昭和通りを抜け出したあたりからである。毎朝新聞の本社ビルの前でタクシーを降りると、裕美は急ぎ足で特別取材チームのおかれている五階の編集室に向かった。

編集室は相変わらず雑然としている。作業机に向かって取材データの整理に追われている高岡啓介の姿があった。大型コンピュータに接続したターミナル・モニターから半導体摩擦の関連記事を引き出し、それを改めて検討しているようだった。

「よう、どうだった？」

裕美は高岡の横においてある椅子に腰をおろした。高岡の口元で煙草が揺れている。特派員時代に禁煙していたと聞いたところがあるが、今回の特集が始まってから、高岡は再び煙草を始めている。

石井裕美は御茶の水駅近くの山の上ホテルで、ある人物と会い、社に戻ってきたばかりだ。取材で会ったその人物は電子業界や外務省、通産省など中央官庁にも深く食い込んでいるようで、驚くほど日米の表



の事情にも通じていた。だが、どこか影のある人間のように見えた。

その男は匿名を条件として、今回の事件の背景を詳しく話してくれた。男はとても神経質で、取材の間、名前を出してもらっては困る、と何度も念を押した。非常に用心深い男である。男は武蔵と名乗ったが、経歴やどんな仕事をやっているかなど、すべて口を噤んで話そうとしなかった。若いのか、歳をとっているのか、外見から見分け難い人物だった。会って楽しい相手ではないが、興味ある話をしてくれた。裕美は久しぶりに興奮を覚えていた。

その男を紹介してくれたのは通産省の田所官房長である。エリート官僚と闇の世界に生きる男との関係……裕美には興味あることだったが、田所との約束もあり、そのことは聞かないことにした。

高岡が裕美にどうだったと聞いたのは、その男のことである。

「眉唾のところもあつたけど、話の筋としては面白かった。データの表付けがないので記事にするのは難しいと思うけど、取材を進める上での参考にはなると思うわ」

「それはよかった……。眉唾というのは？」

「少し誇張癖があるみたい」

「ああいう商売をやっている人間は誰でもそうなんだ。自分だけが一番表の事情を知っているような顔をする」

「そうみたいね」

その男は名刺も出さずに、いわくありげな態度で、些細なことでも、もったいぶって話すのが裕美にはおかしかった。

男はヒントになる情報を幾つか提供してくれた。衝撃的だったのは、背後で秘密結社らしき組織が動いていること、事件はその秘密結社が仕組んだ陰謀だ、と斯定的にいったことである。声を抑えるようにして話す男の話し方には、説得力があった。

「これで、米国の議会図書館にアクセスできるかしら？」

裕美はディスプレイを覗き込みながらいきなり聞いた。

高岡は怪訝な顔をしたが、あっさりとうなずいた。あれこれと、詮索めいたことをいわずに、黙って作業を引き受けるところが、高岡を同

僚としてみた場合、好感が持てる。

「それは可能だと思うが……」

高岡はそういうとターミナルを通信回線モードに戻し、キーボードからパスワードを手早く入力していく。時間を要せずに簡単に議会図書館の図書データ・ベースを呼び出すことができた。

「で、なにを呼び出すのかね」

「ええと、たしか論文のタイトルは『米国市場の防衛』とかいつていた。

筆者はコロンビア大学のロバーツ・ハドソン教授。文字列で検索は可能かしら？」

「大丈夫なはずだ」

そういうと、高岡は検索コードに文字列を入力していった。モニターに英文で「検索中です。暫くお待ち下さい」とメッセージが表示されている。

ターミナル用のコンピュータは大型計算機を通じて、米国議会図書館のデータ・ベースにアクセスを続けている。

やがてモニターに『米国市場の防衛』と題する論文がデーク・ベースに格納されていることを示すメッセージが表示された。あの男がいつていたようにロバーツ教授の論文は確かにあった。裕美はほっと溜息を漏らした。

「全文を必要としますか？ サマリーだけにしますか？」

コンピュータが聞いている。

高岡は論文の全文をプリンターにアウトプットする選択番号を選んだ。

コンピュータは無言でロバーツ教授の論文を呼び続けているようだ。ようやく印面にメッセージが現れた。そのとき裕美はおやっと思った。

「呼び出し中の論文は全文削除されています……検索を続けますか？」

コンピュータは機械的に作業を継続するかどうかを聞いてきている。二人は思わず顔を見合わせた。そんな馬鹿な……高岡は同じ作業をくりかえしてみたが、同じような結果に終わった。コンピュータのオペレーションミスではなく、ロバーツ教授の論文はどういう理由かはわからないが、誰かが全文削除してしまったらしいのだ。

「どういうことになっているんだ」

確かに奇妙なことである。いったん登録された論文が削除されるとは……

：国防関連や高度先端技術関連のデータや論文が安全保障上の理由から時々、外国からアクセスができないようにロックされることは、よく聞く話だ。だが、ロバーツ教授が執筆した『米国市場の防衛』と題する論文は、少なくともその種の論文ではなさそうである。

『米国市場の防衛』は、米国の通商問題を論じた論文で、使用されているデータも公開されているものばかりであり、特別秘密にしなければならぬようなことは含んでいないと、あの男はいつていた。いねば學術論文だ。そんなものをなぜ、データ・ベースから削除しなければならないのか。ただ気になることといえば、ロバーツ教授は論文のなかで現在の日米関係を的確に予測していた、とあの男がいったことだ。

ロバーツ教授が書いた論文、それは今度の事件のシナリオだったとでもいうのか。裕美の質問に対して、男は「そのとおりだ」と、あっさり答えていた。カルテル摘発の裏にはシナリオが存在していた……。

事実とすれば、大変なスクープになる。裕美は緊張で膳がこわばった。

「その論文には、ということが書いてあったのだろう。わざわざ削除してしまうところを見ると、外国の人間には読ませたくないような内容だったのかね。因果なもので相手が見せたくないという、どうしても見たくないというのが我々の商売だ……さあ、どうしてくれようか」

高岡が大きな軀を揺るようにして、そういった。米国の行政当局が意図的にロバーツ教授の論文を議会図書館のデータ・ベースから削除したのだとすれば、これは安全保障条項に抵触する論文だったのか。それとも別な理由があったのか。ともかくロバーツ教授の論文は米国議会図書館のデータ・ベースから削除されている。

「今度の事件は、そのロバーツ教授が書いた戦略対応マトリックスとかいうシナリオを下敷にして、日本企業を対象として実施されている一種の外国企業追い出しの作戦であるとか、あの男はいつてたわ」

「本当か……！ だとすればだ、これは事件の裏まで解明できるということになる……。しかし、本当にそんなことが、その論文に言かれているのかね？」

「わからない……ただ、武蔵と名乗ったその男は、そんな意味のことをい

つてたことだけは確かよ」

「大学教授というからには、身許もしっかりしているはずだ。しかも、米国の通商問題を論じた学術論文だといっていたね。ちょっと信じられない話だが、論文の方はワシントン総局を通じて取り寄せることにして、ともかくロバーツ教授なる人物がいかなる経歴を持つ人間であるかを調べてみよう」

高岡はそういうと、今度はニューヨークにある新聞系の出版社が作っている「ミリオンズ・フーズ・フリー」のデータ・ベースを呼び出す作業に取り掛かった。コンピュータ間のプロトコールは比較的簡単なパスワードを入力するだけで、相手のホスト・コンピュータを呼び出すことが出来る。

国名 米国、大学 コロンビア大学、大学における位置及び役職 教授、名前 ロバーツ・ハドソン、専門分野 通商問題。高岡は手元にある情報を次々にキーボードからホスト・コンピュータに送り込んでいく。それらの情報が同時に検索の条件式として、コンピュータが解析して、該当する人物を捜し出すのがこのシステムだった。

二十分ほども待たされたか、ディスプレイ上にロバーツ・ハドソン教授の個人情報が出てきた。

生年月日 一九五二年、出生地 東京、学歴 横浜アメリカン・スクールから米国のカリフォルニア大学に進学、次いでコロンビア大学で修士過程修了、ペンシルバニア大学で経済学で博士号を取得。同じくポストン大学で理学博士号を取得。職歴 商務省、サンスカイ財団上級研究員、ローガン銀行高級アナリスト、ボストン大学経済学部準教授、現在はコロンビア大学経済学部教授とある。

典型的な研究者としての道を歩んできた人物のようである。それにしても日本生まれの東京育ちとは……。

高岡はさらにディスプレイの画面をめくっていった。次の項目には趣味とか家族構成とかの情報が記載されている。社会的な活動としては、かつてアイコック大統領の個人的アドバイザーを務めていたこと、さらに驚いたことには倒産したモトラム社の政策顧問を務めていることが、ロバーツ教授の個人データ・ベースに書き込まれていた。高岡は作業の手を休めて、

ふうつと息をついた。

「モトラム社の政策を担当する顧問だったのか。そうだとすれば、その武蔵とかいう男がいつていたことは一応信用してもいいじゃないか。彼がどんなことをいつていたのか、思い出せないかね」

テープはもちろんのこと、取材の間はメモを取ることさえ、あの男は許さなかった。だが、こんな商売を十年近くもやっていれば相手の話したとぐらい、再現することはそう難しいことではない。山の上ホテルの一室で武蔵と名乗った男とテーブルを挟んで、取材したことを、裕美は記憶のなかに鮮明に思い出すことができた。

戦略対応マトリックスと呼ばれるシナリオは確か四つの段階に分かれていると、あの男はいつていた。第一段階は貿易摩擦を回避する手段として、輸入数量を制限する措置をとること、第二段階ではこれを長期化させると米国経済が弱体化するので、競争的な相手に対して、合併とか業務提携とかをもちかけることで、相互の協調の道を模索する、第三段階では、こうした政策が効果的ではないと判断された場合とられる措置で、政府を直接動かすことで相手に圧力をかけるとか、競争的な相手に対して、差別的なコンペティション攻勢を仕掛けて、競争者間を分裂させること、第四段階は競争的で敵対的な相手に対しては、あらゆる効果的な手段を駆使して、彼らを米国から完璧に放逐すること……それがその論文の結論であるらしい。

高岡は裕美の話聞きながら、少し考えこむような表情をしていた。確かにその男がいつたことは、現在の状況に酷似しているような面がある。だが、まったく関係ないといえば、そういうこともいえる。偶然だということも考えられる。それにしても気になることは、論文の執筆者であるロバーツ教授が、問題のモトラム社の政策顧問をしているということだ。今、日米間に起こっていることを重ねあわせると、奇妙なことだが、ロバーツ教授が予測したという状況にあまりにも似ている。

「ううん……気になるのは、正直いつてそのことだね。仮に今度の事件にシナリオが存在していたとすれば、それを実施することを決意した人間なり、集団が存在したことになる。それはどんな人間なのか……」

そのことはあの男に聞いてみたが、あの男は自分の命にかかわる問題だから、これ以上は話せないと言って、答えなかった。男の態度はいかにもいわくありげだった。反トラスト法違反で追い詰められていく日本の半導体メーカー、それを遠隔操作しているらしい謀略集団の存在。

「秘密結社の存在……」

高岡は幾度も同じことを口にした。最初の扉の謎を握っている人物は、どう考えてもロバーツ教授ではないのか。だが、ロバーツ教授なる人物は、今度の事件との関連ではどんな立場にあるのかは、「フーズ・フリー」からでは読み取することはできない。その一方で裕美には、ぼんやりとはあるが、事件の輪郭がみえてきたように思えた。

自分でも説明つかないことだが、裕美は異常な興奮を覚えていた。対人関係ではどこか冷淡で、仕事に対しても、どんなことが起ころうが、無感動に対応することができる裕美にしては、今度の事件だけは、珍しく違った態度で取り組んでいる。

あの男がいつていることが事実ならば、確かに奇怪な事件だ。どういうわけか、今度の事件を徹底的に解明しなければならぬ……裕美は使命感みたいなものを感じている。高岡が少し裕美を煽り立てているのは、そのことを意識しているためなのかも知れない。高岡は大きくうなずきながらいった。

「もしいまいった仮説が正しいとするならば、これは大変なことだ。もう少し周辺の取材を固めておく必要があるね。論文の方はワシントン総局で入手してもらおうよう手配しておこうか」

問題は東京サイドの取材である。だが、東京での取材は思うように進展していない。事件が発生して、半月近くが過ぎていくというのに、やはり事件に関する情報は一方的にアメリカサイドから流れてきているだけだ。高岡啓介は経済記者として二十年に近いキャリアを持っているだけに、産業界には幅広い情報チャンネルを持っているが、その高岡ですら音を上げるほど、今度のことでは関係者の口は堅かった。取材チームは大きな壁に突き当たっていた。

情報回路は「米高日低」だ、と高岡啓介は自嘲的にいった。情けないこ

とだが、そのとおりだった。だから東京の取材チームは、司法省や米国の関係団体やモトラム社が主張しているような価格協定、不法取引など、反トラスト法に抵触するような、犯罪行為があったかどうか、事実関係の確認すらできないでいた。日本側の関係企業は「裁判を控えているので、事実関係を明らかにするのは、勘弁順いたい」と、口を揃えている。

「そこを何とか突破しなくっちゃ」

高岡が大きな目玉をぎよろつかせ、自分にいい聞かせるようにいった。

日本の関係者の対応は相変わらずで、口の堅さはいかんともしがたかったが、ロバーツ教授の線をたどっていけば、そこを糸口にして、事件の真相に迫れるかも知れない。高岡も同じことを考えているようだ。

「どう対応するのか、まだ日本側の方針は決っていない、ということらしいわね。業界のまとまりが悪いことが原因のようだけど、取材がやりにくいのも、そのためじゃないかしら？」

「そうらしい。業界は大きく分けると対米恭順派と徹底抗戦派、それに中間派の三つに分かれている。業界には、徹底抗戦を主張する強硬派もいるようだけど、議論の流れは対米恭順派の方向に傾きつつあるとはいわれているんだが、確証がない」

「恭順派って……？」

「簡単にいえば、あっさり犯罪行為の事実を認めてしまつて、賠償金を支払い問題を解決しようという連中のことだが、ことを荒立てたくない通産省も、恭順派の方に傾いているともいわれている。大勢は恭順派の意見で固まるのではないかね」

「そう……」

裕美が言葉少なく答えた。高岡がいったことは、裕美も噂としては知っていた。恭順派の代表格が東洋電気と東京通信機など数社、これに対して徹底抗戦派は目浦と三唱電気、いつもは協調に欠ける日興製作所はどうしたわけか、対応をいまだに決めていないともいわれていた。真偽はともかく、業界の意志統一ができずに、通産省の調整工作が難航を続けていることだけは確かなようだった。

武蔵……たぶん偽名に違いないが、あの男がいつていた言葉が裕美の脳



裏にこびり付いている。ロバーツ教授の論文、日本を陥れようとしている陰謀集団の存在、不自然に沈黙を守っている日本の関係者。今度の事件の謎を解く鍵を握っているのはやはりロバーツ教授ではないか。

「一度取材チームをアメリカに派遣する必要があるんじゃないかと思いましたが、キヤッツはどうか考えます？ この論文を書いたというロバーツ教授にも是非とも一度度会ってみたいし……」

「経費節減ということで、海外の取材は特派員に任せるとするのが社の方針だが、そのことは是非、考えてみよう」

高岡のいうとおりだった。毎朝新聞は購読者が伸び悩んでいることと広告収入の停滞というダブルパンチを受け、給与の一部カットを含め、取材経費の大幅な削減を社員に求めてきている。だから取材活動も、今回のように海外で事件が起こったような場合、現地の取材は現地の特派員が担当することになっている。だが、高岡のことだから、なんとか上の方と交渉して、うまくやってくれるのではないか。裕美は高岡の顔をみながら、他人事のように考えていた。

「それはそれとして、通産省の田所官房長が、その武蔵とかいう人物を、どんな思惑があつて、君に紹介したかだ。その男になにかを喋らせて、我々にそのなにかを書かせようという、通産省としての意図があるんじゃないだろうか……？ 考え過ぎかなあ」

高岡にそういわれてみて、田所官房長がどうして武蔵を紹介したのか、初めて裕美は疑問に思った。高岡にいわれるまで、そのことは考えてもみなかった。田所官房長がその男を紹介したのは、今回の特集取材のことであまり力になれなかったことのエクスキューズと裕美は受け取っていた。官僚と新聞記者とのあいだでは、そうした貸し借りの関係を作ることはいくあることだ。そうした関係を重層的に作り上げている記者が、世間でいわれる優秀な記者なのかもしれない。田所官房長が、例の男を裕美に紹介してくれたことは、その程度のことと考えていた。エリート官僚と闇の世界に生きていような男との関係、確かに興味深いことだったが、そのとき裕美はそれ以上、詮索するようなことはしなかった。

「ともかく面白い人物を紹介する」

そういつて田所が紹介状を言ってくれたことが武蔵と会うことになった、きっかけである。だが、出世階段を駆け足で走るエリート官僚と世間をばかるといって生きていく影の人物との関係。いわれてみれば、なるほどこれは奇妙な組合せだ。あの男を通じて、通産省の中樞はなにかを掴んでいるということなのか。事件の背後に潜む陰謀集団の存在を掴んでいたとしても、しかし、通産省自身がそのことをいい出すことができない事情があるのではないか。それで裕美をあの男に会わせることにした……。その可能性は確かにある、と裕美は思った。あの田所官房長ならば考えそうなことであるからだ。それでは毎朝新聞になにを言かせようとしたのか。「ともかく周辺取材を固めることだ。それ以外に事件を解く鍵はない。それにロバーツ教授のことをもっと詳しく調べる必要があるね」

高岡はそういうと、ターミナルのスイッチをオフに切り替え、大きな軀を勢いよく持ち上げるようにして、自分の席に戻った。

裕美も自分の席に戻った。電話の連絡メモが机の上に残されていた。柏手は東洋経済研究所に勤める久保理恵からだ。この間の電話で、理恵は近くアメリカに出張する予定になっていくと聞いていた。理恵と一緒にアメリカの旅をするのも悪くない……。裕美はそんなことを考えながら受話器を取り上げた。

もう午前零時を回っている。理恵の自宅の電話番号を確認すると、プッシュ・ボタンを素早く押した。ベルが呼び続けているが、誰も出ない。一人住まいの理恵はまだ帰っていないようだった。また遊びあるいているのかな……。裕美の口元に笑いがこぼれた。経済部の同僚たちは、最終原稿をチェックする仕上げの作業を終え、帰り仕度を始めていた。

2

零下二十度の寒風が頬を刺し切るように吹き抜けていった。理恵は思わず身震いをして軀を縮めた。ニューヨークは北極から押し寄せた寒波にすっぽりとおおわれていた。軽いめまいを覚えるほどひどい寒さだ。

小柄で童顔の理恵は、中学生か高校生にでも見えるのか、ニューヨーク

の大人たちは国際空港のタクシー・ターミナルで、出迎えの人を待ち続ける理恵を振り返り、怪訝そうな表情を浮かべて通り過ぎていく。

理恵はウールのマフラーをすっぽりと、頭に巻き付けた。この寒さでは、スタイルを気にするほどのゆとりはない。分厚いコートを偕こんでいるというのに、寒気は遠慮なく肌の奥深くに刺し込んでくる。理恵は小刻みに足踏みを続けた。

大型のセダンが理恵の目の前で、急ブレーキをかけて停車した。

車窓にシオリの顔が笑っている。理恵は安心した。スーツケースをトランクに投げこむと、助手席に滑りこんだ。車内はよく暖房が効いていた。

「待たせてごめん……」

「ひどい寒気が押し寄せているようね」

「それでも、今日は暖かいほうなの」

「そう……」

理恵は驚いた顔をした。

ニューヨークの二月といえば、厳寒の季節だ。寒さも今がピークなのだろう。人々は首をすくめて、急ぎ足で歩いている。が、この寒さもあと一、二週間もすれば峠を越し、まもなく早春の季節を迎えることになる。

シオリの運転するセダンはスピードを加運させ、ニューヨークの市街地に向かった。ロサンゼルスからたった四時間ほど飛行機で移動しただけだが、カリフォルニアのあの温暖な気候に比べて、この東海岸の中心の街であるニューヨークの寒波はひどい。高速道路を走る自動車もアイスバンを気にしてか、スピードはゆるみがちだった。

「もう、仕事は終わったの」

「今日はね……いつまでニューヨークにいるつもり？」

「まだ決めていないの」

「実をいうと、明日からロサンゼルスに出張することになったの……」

シオリはハンドルを握ったままの姿勢でそういった。

シオリが運転するセダンは高速道路を抜け、ニューヨークの市街地に入った。夕刻のニューヨークは家路に向かう人々の群れで道路はひどく混雑している。市街地を抜けると、今度は高級アパートの一群が視野に入っ

きた。

シオリが案内したのは、高層の高級ホテルを思わせるようなアパートメントだった。ゆったりと設計されたリビング、そこが書斎兼用の居間になっているらしく、部屋の片隅にある机の上には雑然と書類やら雑誌などが積み上げている。

三つのベッド・ルームがあった。女が一人で生活するには贅沢な生活環境である。その贅沢な作りが、かえって女の一人住まいの寂しさを浮き出させているようだ。

「理恵、シャワーでも浴びたら  
広いバスルームだった。」

バスから出ると、ソファの前におかれたテーブルに簡単なスナックとグラスが整っていた。趣味の良いソファである。そこに理恵を座らせると、シオリはサイドボードからフランス製のコニヤックを出し、チェコ製のグラスに満たすと、理恵に薦めた。二人は見つめ合うようにして、グラスを上げた。

「明日は、ロサンゼルスとかいっていただけだね」

「そう……同僚が例の事件で拘置所に収監されているものだから、その同僚を見舞うのと、日本系企業の半導体工場を見て回ろうかと思っているの」「だったら一緒にいこうかしら、迷惑かなあ……？」

シオリは当惑した表情をした。理恵が事前にくれた手紙では、今回の現地調査の目的は日本から進出している企業の実態を調べることが目的である、と書いてあった。調査目的からいえば、現地工場の実態を見ておきたいという理恵の気持ちはわかる。だが、今度のロサンゼルス出張は公務である。

どうしようかと、シオリは迷った。

「私がかまわないけど、あなたの仕事の方はそれで大丈夫なの？」

シオリは、婉曲に断わったつもりだ。しかし、理恵は無頓着である。か



まわらない、とシオリがいったことを、文字通りに受け止めているようで、シオリと一緒に米国の旅ができることを、本当に喜んでいる。こうなるかどうかどうしようもない。

「助かるわ……！」

理恵と旅をすることなど、めったに機会があるわけではないのだ。それに理恵が一緒だからといって、仕事に支障が生ずるわけでもないし、もしそういうことになったら、その時に判断すればよいことではないか。西海岸を理恵と一緒に旅するのも、悪くないアイデアのように思えてきた。

理恵は子供のようににはしゃいでいる。理恵は学生の頃からそうだったが、場当りの行動を決めるところがある。東京からいきなりニューヨークに飛び、今度はロサンゼルスに戻ることになる。なんと無計画なことか。それで、肝心な調査の仕事の方は大丈夫なのか、シオリはそのことが心配だった。

理恵が勤務している東洋経済研究所は政府系金融機関の付属研究所とはいつても、そう世間に名の知れた研究機関ではない。その意味で、産業調査員の肩書を持つシオリと一緒にの方が、現地企業の人々に調査協力を要請するにしても、なにかと便利である。シオリの肩書が役に立つというのであれば、それはそれで利用すればよいのではないか。そう思うと、シオリは気が楽になってくる。どっちにしても、一人旅よりは、気心の通じた理恵と一緒にの方が楽しいに決まっている。

「そういえば、裕美も近くアメリカに来るとか聞いていた。あなたも聞いている？」

「本当は一緒に来たかったんだけど、時間の調整がつかないもんで、私だけが一足先に出ることにしたの」

「で、どんな仕事で？」

「はつきりはいつていなかったけど、今度の事件の取材みたいよ……だからあなたに会うのが目的じゃないのかなあ」

「彼女もか……でも、私はそんなことに答えられる立場じゃありませんことよ」

シオリはわざと邪険じゃけんにいった。目が笑っていた。

裕美も反トラスト法違反事件の取材でアメリカにくるらしい。目の前にいる理恵も、今度の調査との関連で、反トラスト法違反事件を徹底的に調べてみたい、そんな意味のことをこの間くれた手紙に書いていた。それぞれ立場は違うとはいえ、今度の事件に対して、三人とも共通の関心を抱いていることになるわけだ。

「彼女はいつ日本を発つのか？」

「今週末じゃなかったかと思う」

「そう……アメリカではどこで会う約束をしているのか？」

「冬の東海岸じゃきついから、できればサンフランシスコかロサンゼルスあたりで遊ばない？ そんなことを裕美はいつていたけど、まだ決めていないの……ともかく毎朝新聞の支局に連絡を入れれば、彼女の所在はわかることになってるの」

「だったらロサンゼルスで毎朝新聞の支局に連絡を試みようか」

「ええ、そうしましょう。……もう一人、アメリカで私を待っているのがあるんだけど、一緒に迷惑になるかな？」

シオリはキッチンにたち、簡単な食事を作っている。大型冷蔵庫から冷凍食品を取り出し、それを電子レンジで暖めただけのものだが、空腹だったせいか、理恵にはとてもおいしく感じられた。

「だれ……待ち人って？」

「彼氏なんだけどさあ」

理恵は照れたようにいった。

シオリは学生の頃からそうだったが、男女の関係については臆病なのか、堅物でおっている。だから佐瀬との関係をあからさまにすることに理恵は正直いって少し躊躇<sup>ためらい</sup>を覚える。そうはいつてもこの場合、ちょっとした説明しておく必要がある。

理恵は佐瀬のことをさらりと話した。今夜のシオリは、理恵の話を黙って聞いていた。

佐瀬とはサンフランシスコで逢う約束になっている。来週にはアメリカで逢えるね、と成田の飛行場まで送ってくれた車のなかで佐瀬はいった。

シオリはさらりと、話題を変えた。

「で、あなたの調査というのは？」

理恵はかいつまんで、米国でどんな調査をするのかを話した。リビングは心地よく暖房が効いている。

理恵の調査テーマにシオリは興味を抱いたようで、コニヤツクのグラスを傾けながら熱心に話を聞いていた。

「私は今度の問題をたんに経済摩擦ととらえるのは誤りだと思うの。……正確にいえば、日米の価値観の相違が正面からぶつかった文化摩擦という方が正しい、私にはそう思える」

「文化摩擦か、これは根が深い問題ね。そうだとすれば、司法取引をするのも難しいかもしねない」

「司法取引……？」

「本省の方針なの……業界もそういう方向に傾いているみたい。でも、こちらの顧問弁護士は徹底的に闘うことを薦めているもんだから、少し迷っているんだ」

「取引の条件は……？」

「これでも私には守秘義務があるの」

シオリはそういうと、意味ありげな笑いをした。理恵もつられて笑った。

産業調査員といえば、こつした問題では正規の外交交渉とは別途に、利害当事者と直接交渉を進めるなど、裏方の仕事を担当するのが仕事だ。外交官と同様に厳格な守秘義務を負わされているのは、そのためだった。

「本省の方もたいした知恵があるわけではなさそうで、日本企業は米国での生産を自粛すること、迷惑をかけたと思われる米国の半導体メーカーに対して、請求されている損害賠償に応ずる……その二つが司法取引の条件らしいの」

シオリはあっさりといった。

日本企業が米国から一時的に撤退することは、考えられることだ。佐瀬も同じことをいつていたのを理恵は思い出した。だが、撤退を条件に米国が司法取引に応ずるかどうかである。相手にされそうにない、理恵にはそう思える。

事件の経過を考えてみるに、どうも裏がありそうな気がしてならないの

だ。理恵は事件の経過を思い起こしてみた。どれもこれもが疑惑に満ちている。ロバーツ教授が書いた例の論文にしてもそうだ。事件は誰かが仕組んだのではないか。確証はないのだが、理恵にはそう思えてならない。

「あなたもそう思う？　うちの顧問弁護士も同じことをいつていたわ。敵の正体もわかっていないというのに、弱腰で司法取引などをいい出すものではないってね。まず、闘う覚悟を決めなくては……そのためにも闘う論理を明確にしなくっちゃね」

シオリは窓のそばに立った。

第一、リングに上がる前に闘いを放棄するようなことって、このアメリカではとても考えられないことだ。実際、本省の態度は闘う前から試合を放棄したようなもので、シオリにはいかにも軟弱にみえてくる。

通商摩擦で米国からいたぶられ続けてきた通産官僚たちは米国がどんな無理難題をいい出そうが、感覚が麻痺しているのか、反応が鈍くなっているようにすら思える。

それに方針がくるくると変わる。産業調査員に対する指示にしても、局によっても違うし、その日によっても変わる。要するに本省の幹部たちの腰がすわっていないのだ。本省の考えは、ともかく司法取引の可能性を追求すること、シオリに対してはそれ以外の指示は与えてこない。だから裁判の準備も遅れている。弁護団の編成案を本省に提出しているのだが、いまだに返事がない。

産業調査員としての本省に対する意見具申も幾度か握り潰されたこともある。そのことに本気になって腹を立てたこともある。

さすがに職務上の機微に触れるようなことは話さなかったが、杯を重ねたコニヤクで勢いづいたのか、シオリは憤懣ひんまんやるかたない気持ちで理恵に話した。エリート官僚であるシオリにしても、仕事のことでは自分と似たような悩みを抱えているのか、理恵はそう思うとシオリに改めて親近感を持った。

「少し愚痴ってしまったみたいね」

「たまにはいいでしょう」

理恵は言葉少なくていい。シオリは仕事の疲れが鬱積うっせきしているようにみ



えた。女が仕事を通じて自立することがいかに難しいことであるか、理恵は自分の職場の男たちのことを思い浮かべながら考えていた。

来月早々から司法省当局による予備尋問が始まる。司法省当局はうんざりするほど膨大な資料を日本側に要求するとともに、事実関係の確認を求める数百項目に及ぶ質問状を日本の関係企業に送りつけてきていた。

関係資料に目を通すだけで、それは大変な作業である。そのひとつひとつに回答を準備し、かつ反証する義務を日本側は負っているのだ。さらにモトラム社が提訴している私的訴訟に対する準備も、これと並行して進めなければならぬ。だが、日本側の裁判の準備は明らかに遅れている。まだ弁護団の組成すら十分ではなかった。業界が今度の問題でどう対応するのか、方針が固まっていないからである。

その一方では、上下両院が合同で設置した特別調査委員会は、外国企業の活動を規制する法案を検討しているとも伝えられ、独禁法違反事件は思わぬ方向に発展しそうだった。それに気になるのは世論の動向である。対日感情は日増しに悪化している。シオリは焦りを感じているようだった。

「そういえば、あなた、ロバーツ教授って知っている？ コロンビア大学で経済学を教えている人らしいんだけど」

「ロバーツ教授？」

「ロバーツ・ハドソン。フーズ・フリーによれば、かつてアイコック大統領の個人的なアドバイザーを務めたほか、問題のモトラム社の政策顧問をしているらしいの」

「それがどうしたというの？」

「そのロバーツ教授が大変興味深い論文を書いているの。『米国市場の防衛』というのがロバーツ教授が書いた論文なんだけど、現在の状況を的確に予測しているわ。それを読んだときは本当に驚いた」

「ロバーツ教授……」

シオリにはすぐには思い出せなかった。しかし、思い当たる人物が一人いる。それはチェンバレンが紹介してくれた男だ。

一年ほど前のことになるか、あるパーティーでのことだったが、チェンバレンが自分の親しい友人だといって、ひとりの男を引き合わせてくれた。

その男は、確かロバーツというファースト・ネームだったのではなかったか。チェンバレンは、その男とは大学時代からの付き合いだと、いつていた。二人ともコロンビア大学の卒業生だという。経歴も一致する。理恵が話したその男の経歴からいうと、間違いなさそうだ。

ロバーツ教授の風貌を、シオリは思い出した。尊大な物腰や態度、特徴のある喋り方からみて、典型的な東部エリート階層に属する男だった。シオリに対してはことさら慇懃<sup>いんきん</sup>だった。どこか影のある人間にみえたことをシオリは覚えている。そうだとすれば、今度の事件の仕掛人は意外にも、シオリの身近にいたことになるわけだ。

ロバーツ教授が書いたという論文が今度の事件のシナリオだとすれば、それは大変興味深いことである。しかもモトラム社の政策顧問ということも、事件との関係を匂わせている。そのロバーツ教授がこれまた産業調査員室の顧問弁護士を務めているチェンバレンと友人関係にあったとは……。

米国では弁護士や大学教授だからといって安心はできない。事件屋みたいな仕事をやっている連中も少なくはない。事件や問題のありそうなところ、キナ臭い匂いが立ちこめている現場には必ずといってよいほど、彼らの姿があつた。カネと名誉を求めて、彼らは激しく勤めている。それに米国では弁護士は過剰である。仕事にあぶれた弁護士にとっては、米国の法律に無知な外国企業は格好の鴨だった。

彼らにとって、日本企業ほどの上得意はない。米国の法律に無知であるだけでなく、彼らに気前よく幾らでもカネを弾んだ。実際、悪徳弁護士の餌食<sup>えしき</sup>になってカネを巻き上げられた日本企業も少なくなかった。

「ロバーツ教授もそういう種類の人間なのかしら……？」  
理恵が問いた。

「わからない」

彼らはこの種の事件にたとえ直接の利害関係がなくともいろいろな形で介入した事例をシオリはいやというほどみてきている。被害者に依頼されて弁護を担当するなどという生やさしいやり方ではない。場合によっては、事件そのものをデッチ上げ、被害者になりかわって、裁判費用を自己負担してまで裁判に持ちこむケースすらあるほどだ。シオリはそんな意味のこ

とをいった。

「日本とはだいぶ事情が違うのね」

理恵がいった。

「そうなの……」

今度の反トラスト法違反事件の背景にそうした謀略集団が存在するとすれば、厄介なことである。奴らはカネには汚い連中だ。カネのためならば、法律知識を駆使して、どんな汚い手段でも使う。チエンバレンが自分の友人だと紹介してくれたロバーツ教授が、そういった類の人間なのか。

しかし、仮にそうだとすれば、彼らの狙いは明白だ。金銭を要求してくることは、間違いないように思える。どの程度の金額を要求してくるかもよるが、彼らの目的がカネにあるとしたら、問題の解決はそう難しいことではなさそうな気がする。

思い当たることといえば、倒産したモトラム社が「三倍額賠償」を求める裁判を請求していること、それにスコット社長自身が、自ら再建に乗り出すと声明していることだ。たいていの場合、倒産した会社の経営首脳は経営責任をとって引責辞任するのが、この米国でも慣例になっているのだ。それを敢えて、スコット社長は自らの手で会社再建を図るといっている。

もちろん、倒産した経営者が会社再建に当たったとしても、法律的には特別の制限は受けるわけではない。だが、モトラム社のような大型倒産の場合は別である。その意味マススコット社長が記者会見で、引続きモトラム社の経営にあたりと声明したことは、奇異に映った。スコット社長がモトラム社の経営者として、残留を決めた本当の担いは、やはり三倍額賠償請求に目あるのではないか。それを資金として、スコット社長は別な事業でも考えているのか。

三倍額賠償請求を裁判所がともに認めることになれば、少なくとも三十億ドルから四十億ドルという巨額の現金をスコット社長は手にすることができる。これは嬉かに魅力的なビジネスである。

「すごい話ね……！」

理恵が相づちを打った。

本省が態度を曖昧あいまいにして、結論を先送りしているのはそのためではな

いか、シオリにはそのようにも思えてきた。

ロバーツ教授はどういう人物なのか、チェンパレンを通じて一度調べてみる必要かある。シオリはそのことを真剣に考えていた。

カーテンの隙間から朔の光が差しこみ始めるまで、二人は熱心に日米関係のあり方を話し続けた。気が付いてみると、時計は午前七時を指していた。シオリが大きく手を上げて伸びをした。結局、二人は一睡もせず話した。シオリは熱いコーヒーをいれた。渴いた喉にコーヒーがうまかった。

3

それから三十分後、アパートメントを出て、二人はタクシーでニューヨークの飛行場に向かった。

今朝はひときわ厳しい冷えこみだった。二人は予約なしでカウンターに立ったが、待たされることなく、ロサンゼルス行き航空便に乗りこむことができた。飛行機のなかも空席が目立っていた。

理恵は先ほどからちよつと気になることがあった。二人連れの男のことだ。最初は気のせいかと思った。どうもそうではなさそうである。先ほどから理恵たちの後を尾けるようにして、ぴったりとついてきている。意図的な尾けかただ、と思った。搭乗手続きを行うカウンターでは、理恵たちの座席シートを確認するようにして、自分たちの座席を予約していたのを覚えている。

スチュワード스에案内され、機内に入った時にも二人の男の姿があった。二人の男は理恵たちの席の斜め前の席に腰を降ろし、新聞を片手に時々窺うような視線を送ってくる。そう崩れた感じの男たちではないが、なぜか不気味な存在だ。

考えてみれば、尾行をするにしてみれば大胆不敵というか、こんなあからさまな尾行の仕方では正体がばれてしまうのではないか。素人といふべきか、それとも大胆といふべきなのか。どちらかといえば、示威行為のようにも思える。彼らのことをシオリにいふべきかどうか、理恵は迷った。

「シオリ……気が付いている？」

理恵がシオリの耳元で囁いた。

「ええ、もちろん……でも、知らないふりをしていてね。こういうのはいつものことなんだから」

「……？」

シオリはアタツシエ・ケースから書類を引き出すと、熱心に読み始めた。ロサンゼルスまでの四時間あまりの旅を何者かに監視されているような気分で過ごすのは、とても耐え難いことのように思えてくる。

旧式の727が轟音を響かせて、地上に浮いた。白く雪化粧された大地がまたたくまに遠ざかっていく。そばに座るシオリは熱心に書類に目を通し、時折ノートにメモを書きこんでいる。これから始まる批判の予備調査をしているようだった。理恵は雑誌を広げて目を通して見たが、例の二人の男のことが気になって、少しも頭に入らない。理恵はもう一度二人の男の方を振り返ってみた。眼鏡をかけた男と視線があつた。男は慌てて、視線をそらした。いつものことだ……とシオリはいった。彼らはいったい何者なのか。

二人の男のうち一人は、眼鏡をかけたいかつい顔だちの男で、暗く陰険な顔つきをしている。もう一人はでっぷり大り、いつも口をもぐもぐさせている。

眼鏡をかけた男が時折、鋭い視線を走らせる。明らかに二人を監視していることは間違いないようである。いっそのこと、こちらから声をかけてやろうか。持ち前の好奇心を抑えられなくなりそうで、理恵は立ち上がった、二人の男に声をかけようとした。

「やはり気になる？」

書類に目を通したままシオリが聞いた。

「失礼な奴らね……何者なの」

「米国の政府機関の人間よ、彼らは私を監視するのがお仕事らしいの」

「政府機関の人間……？」

「そう……」

シオリは平静である。

「でも、どうしてもあなたを尾行しななければならないの。まるで敵国の人間を監視しているようじゃないの……抗議して止めさせればいいじゃない」  
シオリは含み笑いをしている。こういうことはシオリの職業からして、毎度のことなのか、慣れたようすである。

「日本とアメリカは交戦状態にあるの、経済という名のついた戦争をね」  
「日本は同盟国でしょうに……！」

「政治的な枠組みはそうなっているかも知れない。しかし、経済関係では両国は正面から衝突をくりかえしている。今度の反トラスト法違反事件は太平洋戦争になぞらえれば、米国が逆転攻勢に出たミッドウエー海戦というところかしら」

「戦争……？」

「そう、戦争のさなかに敵国に乗りこんだ女スパイというところが私の役どころで、彼らはその女スパイの行動を監視している防諜要員というところかしら」

シオリは冗談めかしていった。だが、冗談の響きはない。言葉が重たかった。日米関係は考えている以上に厳しい状況におかれていることを理恵は悟った。

ジエトロの産業調査員といえば、公的な身分である。それを米国政府は要員を配置して監視下においている。日米関係はそこまで悪化しているということなのか。米国政府は日本人のことを全く信用していないということなのだろうか。理恵には日本企業を反トラスト法違反で摘発した意図がみえてきたように思えた。

「いつから……？」

「そうね、事件が摘発されるちょっと前からだったかしら……もう、あの二人とは顔なじみよ。もつとも挨拶をかわすような間柄ではないけどね」

「FBI、それともCIA……？」

こういうことに関しては、理恵はさしたる知識はない。テレビや映画で日本人には馴染みとなっている米国の捜査・調査機関の名前を上げてみた。

「さあ……確かめたことがないんで」

727はちょうど米国大陸の中央部にさしかかったところだった。間も

なくロッキーの山並がみえてくるはずだ。二人連れの男たちはのんびりと構え、眼鏡の男は雑誌に読みふけっている。太った男の方は相変わらず口をもぐもぐとさせている。どこか漫画的な男である。

「もつと若くて、ハンサムだったらよかったのに……ね」

「ほんと……！」

二人は声を上げて笑った。

理恵はひどい睡魔に襲われた。いつのまにか、寝こんでしまったようだ。

気が付いてみると、機窓に明るい西海岸の太陽が差しこんでいた。午前十時にニューヨークをたった727は、四時間余りで目的地のロサンゼルス上空にさしかかった。東部時間とは三時間の時差があるので、ロサンゼルスはちょうど午前十一時を回ったところだ。昨夜は徹夜である。昨夜の疲れが出たのか、さすがのシオリも、そばのシートでぐっすりと寝こんでいた。727は機体を揺らせながら着陸態勢に入った。

理恵は米国に入国して、まだ二日目なのにサンフランシスコからニューヨークに、そして今度はロサンゼルスへと、アメリカ大陸を二度も横断したことになる。それにしてもニューヨークではたった一泊、それもシオリのアパートメントに泊まり、飛行場と彼女のアパートメントを車で往復しただけだ。なんのためのニューヨークだったのか。収穫といえば、シオリと議論したことだけだ。少しだけ惜しい気がする。

まあ、それでもよい。理恵の調査の狙いは日米の投資摩擦を米国の識者からあれこれ意見を聞くことにあるのではなく、現地の工場を訪れ、その現地工場の実態をこの目で確かめることにある。幸いこの西海岸には、日本から多数の企業が工場を進出していた。シオリと一緒にならば、そのうち幾つかの工場をみることもできるはずだ。東京で連絡をとってきた東京通信機の工場もこのカリフォルニアにあった。

調査報告の骨格は固まっている。あとは肉付をするだけで充分である。シオリと昨夜話したことで、問題の所在を整理できたように思える。調査報告の結論、それは東京で考えたことに修正を加える必要はないのではないのか、そう確信を深めた。あとは現地の状況をこの目で確かめることだ。

理恵はもう一度、窓に広がるカリフォルニアの大地に目を落とした。口

サンゼルス<sup>の</sup>街が近付き、ロングビーチ空港が眼下に広がってきた。今日のロサンゼルスは快晴だった。穏やかな日差しが淡い緑の草原を照らし出している。

理恵は大きく伸びをした。

飛行場にはロサンゼルス・ジェット口の青木という中年の職員が出迎えに姿をみせていた。青木が用意した自動車に乗りこむと、二人はそのままホテルに向かった。二人の後をつけてきた男たちはどうしたことなのか、姿は見えなかった。

ロサンゼルスは車で移動を前提に作られているような街で、地下鉄や都市交通がまるで整備されていない。漠然とした広がりを持ち、とらえどころがない街だ。

青木はおどけた調子で、ロサンゼルスのあれこれを面白おかしく話した。陽気な中年男である。現地採用の職員で、ロサンゼルス・ジェット口に勤務して、二十年になるといった。日本語に奇妙な訛<sup>なまり</sup>があるところからみると、二世なのか。

シオリは時折バックミラーをのぞきこんでは、後続車を確かめている。やはりあの二人連れの男たちを気にしているようだ。それらしい車は確認できなかった。理恵と顔を見合わせて、笑った。

二人を乗せた車を後続車がどんどん追い抜いていく。青木は安全運転だった。車は空港のすそばで高速道路に乗ると、やがてロサンゼルス川の先に高岸ビルが連なるアルコプラザが見えてきた。車はダウンタウンを一周する形で、予約してあるシェラトン・グラント・ホテルに向かった。ホテルはバンカーヒルのすぐ近くにあり、ロサンゼルス地区連邦裁判所も歩いて、十分ほどの距離にあった。青木が手配しておいてくれたものだ。街は東部から寒波を逃れてきた観先客で賑わっているようだ。

車はややスピードを落として、ダウンタウンに入った。ハーバー・フリーウェイをブロードウェイ・プラザの方向に向かって左に曲がり、さらに車は花市場の方向に向かって走っている。車は花市場のあたりで左折した。ここをまっすぐ南の方向を指すと、突き当たりがリトル・トウキョウである。リトル・トウキョウを右手にみながら左折した。青木は親切のつもり



で、ダウンタウンを一周してからホテルに向かうことを考えているらしい。シオリは市内観光にはあまり関心がなさそうである。時々、うなずくだけで、ほとんど無口に近く何事かを考えている。青木はおかまいなしだ。ときおり運転席から振り返っては饒舌な口調でロサンゼルス観光案内を続けている。ダウンタウンの裏通りはまだ日が充分に高いというのに、道路の両側に段ボールを敷き、黒人やメキシカンが横だわっている。通り過ぎる車を彼らは虚ろな目付きで焦点なく見つめている。失業が社会問題を引き起こしているようだった。

エンゼルス・プラザを通り扶けると、左手にワールド・トレード・センターがみえてきた。そのすぐ先に今晚一泊する予定になっているシエラトン・グランド・ホテルがあるはずだと、シオリがいった。青本の親切心が結局、ホテルまでだいぶ遠廻りをしたことになる。理恵にはロサンゼルスが初めてのところだということもあるので、それなりに旅の気分を味わうことができたが、シオリは不機嫌だった。

時間が早かったせいか、ホテルのロビーは閑散としていた。十四階建ての高層ホテルで、二人の部屋は十二階の五八九号室と五七八号室と決まった。手続きをシオリができばき済ませた。ロビーの奥の方にコーヒールoungeがある。なにげなくコーヒールoungeの方を見ると、理恵たちよりも一足早くホテルに到着していたらしく、例の二人連れの男が鋭い視線を油断なく走らせ、理恵たち二人のようすを窺っていた。

( つづく )

